「着信記録」

　四月、大学の入学式を終えた新入生が講堂から波のように出てくる。その人波から少し離れたところに、二回生の留美と恭平が険しい顔で話していた。  
「もう、ホテルも予約してあるんだ」  
「まさか、選ばれるとは思わなかったんだもん」  
  
　恭平と留美は、五月の連休にオートバイでの旅行を計画していたのだが、大学の交換留学生審査に留美が受かり、イギリスに二ヶ月間行くことになった。  
「そりゃ、恭平には悪いと思うけど、こんなチャンスめったにないから」  
「俺と旅行することは、いつでも出来ると思っているのか」  
「そんなこと・・・比べられないでしょ。こっちは、また今度ってわけにいかないんだから」  
「また今度、か。俺に二度と会えないかもしれないぞ」  
  
　出発まであと一週間、友達の恵子とイギリス行きを祝うために飲みに出かけた。夕暮れのレストランのテラスでワインを飲んでいると、救急車がテラスの前を通り過ぎて行った。救急車を目で追う留美に恵子が言った。  
「留美、どうしたの」  
「ううん、なんでもない」  
「ねえ、それで恭平とはあれから話しもしてないの」  
　留美は、ワインを飲み干して答えた。  
「そうよ。もう二週間になるわね」  
「じゃ、恭平が言ってたこと本当だったんだ」  
「何か言ってたの」  
「うん、あんな女もう忘れた。って」  
「ふーん、まあいいわ。これですっきり、むこうへ行けるわ」  
　とは言ってはみたが、しこりが心の隅に残ったままだった。  
  
　出発の前日、留美の携帯電話に恭平からかかってきた。無視しようと思ったが、とりあえず出てみると、いつもの恭平の調子とは違っていた。  
「もしもし、上田恭平と申します」  
「はい」  
「あのう、失礼ですけどルミさんですか」  
「冗談は止めてよ」  
「すみません、ぼく、あのう」  
「言いたいことがあったら、はっきり言いいなよ」  
「あの、実はぼくの携帯の着信記録にルミさんの記録があって」  
「そりゃ、そうでしょ。で、なんの用」  
  
　恭平の話しは、留美の思いもよらないことだった。恭平は、交通事故で記憶を無くしていた。体のほうは、順調に回復しているのだが、記憶は戻らず自分が誰なのか思い出せないと言う。そこで、自分の携帯にあったルミの番号にかけたのだった。  
「本当に記憶がないの」  
「はい、ほんとうです。僕のこと教えて下さい」  
「じゃ、試しに行くわよ。今、どこにいるの」  
「はい、ぼくが住んでいたらしいアパートです」  
  
　留美が恭平の部屋のチャイムを鳴らすと、松葉杖をついた彼が出てきた。留美の顔を見た恭平は、首をかしげて言った。  
「あの、なんでしょうか」  
　恭平の不思議そうな顔は、記憶喪失が真実であると告げていた。  
「ほんとうに忘れたようね。留美です」  
「散らかってますけど、よかったら入ってください」  
　留美が部屋に入ると、恭平が台所に向かいながら言った。  
「インスタントしかないけど、コーヒー入れます。座っいてください」  
「あの、私が入れるから」  
「ああ、どうもすみません」  
  
　恭平が大きなクッションに腰を下ろした。彼女は、手際よくポットやカップを用意している。  
「あのう、ルミさんはここに来たことがあるんですか。カップがある所も知ってるみたいだし。ぼく、ここに来た日なんか、どこに何があるのか分からなかったんです」  
  
　留美は、恋人だったことを話すべきかどうか迷っていたが、  
「あっ、たいていどこでもカップとか置いてある場所、決まってるでしょ」  
　そう言って、流し台の下からフライパンを取り出した。  
「ほら、フライパン。ね、だいたいここにあるのよ」  
  
　留美がコーヒーを入れて、恭平の傍に座ると彼が言った。  
「あのう、ぶしつけで悪いんですけど、ルミさんとぼくはどういう」  
「大学が同じで、サークルで知り合ったのよ。恵子のことは、覚えて・・・ないか」  
「はい、すみません。その人と僕は」  
「ああ、特別な関係じゃないわよ。あなたには、いっぱい友達がいたわ。そうね、あなたは面倒見が良くて、みんなに信頼されてた。私もその中の一人」  
「そうですか」  
「そうよ、旅行・・・合宿の手配なんか全部やってくれて。だから、恵子なんか恭平の頼みだから断れないわ。って言いながら、楽しそうにサークルの世話をしていたわ」  
  
　恭平は、コーヒーカップを見つめて言った。  
「そうですか。そんな良い友達を、みんな忘れてしまった」  
「あせらないで、ゆっくり思い出して」  
「はい、ありがとう。また、電話かけても良いですか」  
「ごめんなさい、私明日からイギリスへ留学するんです」  
「そうですか、頑張って下さい。あなたのような優しい人なら、あっちでもすぐに友達ができますよ」  
「あ、ありがとう。それじゃ、私帰ります」  
「忙しいのに、どうもすみませんでした。ぼくには、友達がたくさんいたことが分かりました。少し楽になりました。」  
  
　ルミが立ちあがると、恭平も立とうとした。  
「いいのよ、まだ治ってないのでしょう。そこに居て。帰国したら、また来るから」  
　恭平は、笑みを作り小さく手を振った。  
  
　留美は、恭平のことを忘れたわけではないが、イギリスにいる間は、英語の勉強に専念して手紙も出さなかった。事故で前の恭平と違うとは言っても、気持ち良く送り出してくれた彼のためにも一生懸命に学んだ。  
  
　充実した二ヶ月、そして帰国。留美は恭平に電話を入れたのだが、その番号には繋がらなかった。  
「あれ、携帯代えたのかな」  
　留美は、恭平の部屋を尋ねてチャイムを鳴らしたが、恭平は出てこなかった。しかたなく、留美が帰ろうとすると隣の部屋の住人が出てきた。  
「そこ、誰もいないよ」  
「えっ、いつから居ないんですか」  
「二ヶ月ほど前。そこの人、オートバイに乗っていて居眠り運転のトラックと衝突して。即死だったらしい」

　　　　　　　　　　　　　　完